



### CONTENTS NIHONGO-KYŌIKU TSŪSHIN No. 63/JAN 2009

- 表紙・特集1 ..... 1  
現場の機動力を支援する大学院プログラム  
—各国の日本語教育界をリードする人材の養成—  
日本語国際センター 研修事業課  
今井理恵・専任講師 築島史恵
  - 表紙・特集2 ..... 4  
「みんなの教材サイト」リニューアル!
  - 授業のヒント ..... 6  
教室を楽しむ工夫  
—指名やグループ作り—
  - 新聞・雑誌から見る現代日本 第31回 ..... 8  
ケータイ小説
  - 本ばこ (新刊教材・図書紹介) ..... 11
  - 文法を楽しく!! 第13回 ..... 14  
「取り立て助詞」
  - KC (関西国際センター) 研修生の  
Nipponレポート 第13回 ..... 16  
服を無駄にしませんか
- ※ 本誌で、ルビが文字の下に付いているのは、紙や物差しなどでルビを隠して、漢字の読みの練習ができるようにするためです。

### On the Web

http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/index.html

以下の記事はJFのウェブサイトのみにてご覧になれます。

- 海外日本語教育レポート 第20回  
インド中等教育における外国語教育と日本語教育の位置づけ  
バンダ・ナビン  
デリー大学東アジア研究科 政策研究大学院大学 (博士課程)

### 『日本語教育通信』 第63号

2009年1月発行

編集・発行 国際交流基金 日本語グループ  
〒330-0074 埼玉県さいたま市浦和区  
北浦和5-6-36  
国際交流基金日本語国際センター制作事業課  
TEL. 81-48-834-1184 Fax. 81-48-834-1187  
E-Mail. jfnct@jpf.go.jp  
編集協力  
株式会社アーバン・コネクションズ

今号をもって『日本語教育通信』を印刷物として発行することを休止します。長い間ご愛読頂き、ありがとうございました。今後はウェブサイトでの情報提供をさらに充実させていきます。引き続きウェブ版『日本語教育通信』をご活用下さい。  
http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/  
(次回更新予定 2009年5月)

## 現場の機動力を支援する大学院プログラム

### —各国の日本語教育界をリードする人材の養成—

日本語国際センター 研修事業課 今井理恵・専任講師 築島史恵

国際交流基金日本語国際センター (以下「センター」) では、各国や各地域の日本語教育界のリーダーとして活躍する人材を養成するために、海外の非母語話者の日本語教師を対象として、大学院プログラムを開設しています。センターと政策研究大学院大学、国立国語研究所の3機関が連携して運営しているプログラムです。修士課程は2001年に始まり、2007年度までに24カ国61名の教師がこのコースを修了しました。博士課程は2004年に始まり、2008年3月に博士第1号が誕生しました。この大学院は、国際交流基金が行っている海外の日本語教育への支援の中でも、特にその中核で機動力となって活躍できる教師を育てるための特色あるプログラムです。

### 《修士課程：日本語教育指導者養成プログラム》

#### 1. 概要

このプログラムの目標は、日本語や日本語を教えることに関して高い専門能力を持ち、日本文化についても幅広い知識や洞察力を持つ人材を育てることです。このプログラムは、1年間で、他の大学院の2年間の内容を修了します。長い間、現場を離れることができない現職の教師が主な対象者だからです。そのため、この1年間は学期と学期の間に1週間程度の休みがあるだけで、とても厳しいスケジュールで進みます。



修士プログラム第7期修了生

#### 2. リーダー (指導者) を養成するためのプログラム

##### (1) カリキュラム

表1のようなカリキュラムから33単位以上の単位を取ります。このカリキュラムの中で、特にリーダー養成という点から特徴的なのは、「教師教育論」という通年科目です。この科目では、まず「教師の役割」や「教師の資質」について学生と教員が一緒に考えたり、自国や地域の「学習環境マップ」を作ったりします。そして、それぞれの現場で、実際に何が「リーダー (指導者)」に求められるのか、ということをおまえて、このプログラムに参加する姿勢を考えます。また、1年間、他の授業で学んだことを、自国や自分の現場にどのように生かせるか、を考えます。さらに、「ダイアリー」を書いて自分自身をふりかえること、それを「ジャーナル」という形で、1年に5回提出することが義務づけられています。この継続的な課題で、学生自身が、自分の意識や考え方が1年の間にどう変わっていくかを自己確認します。

表1：日本語教育指導者養成プログラムのカリキュラム（2008年度）

（単位数が書いてある科目以外は、すべて2単位。2単位のために、90分の授業が15回あります。）

| 領域       | 秋学期（16週間）               |     |     |    | 冬学期（8週間）        |    | 春学期（16週間）                                 |    |        |    | 夏学期（8週間） |    |
|----------|-------------------------|-----|-----|----|-----------------|----|---|----|--------|----|----------|----|
|          | 10月                     | 11月 | 12月 | 1月 | 2月              | 3月 | 4月  | 5月 | 6月     | 7月 | 8月       | 9月 |
| 言語       | 日本語表現法演習<br>日本語学Ⅰ       |     |     |    | 日本語学Ⅱ<br>*対照言語学 |    | *社会言語学<br>*言語学概論                          |    | *認知言語学 |    |          |    |
| 言語教育     | 日本語教育概論<br>日本語教授法Ⅰ（4単位） |     |     |    | *日本語教授法Ⅱ        |    |   |    |        |    |          |    |
|          | 言語教育研究法                 |     |     |    |                 |    |   |    |        |    |          |    |
|          |                         |     |     |    | 教師教育論           |    |   |    |        |    |          |    |
| 社会・文化・地域 | 現代日本の教育と文化              |     |     |    |                 |    | 現代日本の社会システム<br>*異文化コミュニケーション<br>*言語教育政策研究 |    |        |    |          |    |
|          |                         |     |     |    | *日本事情教育研究       |    |   |    |        |    |          |    |
| 特定課題研究   | 演習Ⅰ（3単位）                |     |     |    |                 |    | 演習Ⅱ                                       |    |        |    | 演習Ⅲ／論文   |    |

\*は選択科目。特定課題研究の夏学期は、演習Ⅲ（レポート）か論文のどちらかを選択。

表2：修士生の研究テーマ例

| 内容       | 研究テーマ   | 国      |
|----------|---|--------|
| 漢字指導     | フィリピン日本語学習者と教師の漢字学習に対するピリーフとストラテジー使用              | フィリピン  |
|          | 漢字の多面的な学習を目指した学習教材の作成に関する研究                       | ブラジル   |
| 語彙指導     | ドイツの成人学習者向け初級日本語コースにおける語彙学習－復習練習を取り入れる試み－         | ドイツ    |
| 文法指導     | キューバの日本語教育の現状を考慮した受身文の指導の考察                       | キューバ   |
|          | ミャンマー人日本語学習者の「は」「が」の学習上の問題点と指導上の留意点について           | ミャンマー  |
| 教室活動     | マレーシアの中等学校におけるノン・ネイティブ日本語教師のための「場面のある練習」          | マレーシア  |
|          | コミュニケーション重視の教室活動の展開－「総合日本語」の授業の改善を目指して－           | 中国     |
| 会話指導     | ドラマを用いた日本語会話授業－コミュニケーション能力の養成を目指して－               | インドネシア |
|          | 初級から中級への橋渡しとなる会話授業に関する一考察                         | キルギス   |
|          | －アラバエフ名称キルギス国立大学付属社会科学東洋学での試み－                    |        |
| 読解指導     | 読解ストラテジーの使用から見た物語文の読解過程                           | ウクライナ  |
|          | －キエフ国立言語大学における読解指導の改善に向けて－                        |        |
|          | 要約力養成に向けた内容理解のタスクの導入－中級レベルのベトナム人学習者を対象に－          | ベトナム   |
| 聴解指導     | 「モニター」ストラテジー指導を初級聴解授業に取り入れる試み－「質問」の活動を通して－        | 中国     |
|          | ピア学習による仮説検証型聴解授業の試み－カザフ民族大学を例に－                   | カザフスタン |
| 作文指導     | 韓国の高校における作文授業の現状と改善案－済州外国語高等学校でのピア推敲活動を通して－       | 韓国     |
| シラバス開発   | ビジネス・コミュニケーションを中心とした中級向けのシラバス開発                   | インド    |
|          | －日印ビジネスの現場における日本語使用実態調査をもとに－                      |        |
|          | マダガスカル人日本語ガイドのための「親光日本語」シラバス作成                    | マダガスカル |
| 教材・テスト開発 | ハンガリーの中高等教育用の日本語教科書作成にむけて                         | ハンガリー  |
|          | ジャカルタとその周辺の日系企業のニーズを踏まえた大学生用日本語会話教材の作成            | インドネシア |
|          | 口頭表現力を測定するテストの開発                                  | ブラジル   |
| その他      | ケニアにおける日本語教育学習環境の研究                               | ケニア    |
|          | コミュニケーション・アプローチに基づく授業における視聴覚教授メディアが学習者の学習意欲に与える影響 | マレーシア  |

今まで提出されたジャーナルを見ると、①理論と現場の実践の関連性、②自分や自国の人たちの教授観や学習観、③他者との共同活動の意義などについて、次第に深く考えるようになることがわかります。

(2) 特定課題研究

このプログラムで各自が行う研究も、自分の教授技術を向上させるだけでなく、まわりの教師達に成果を還元できるものでなければなりません。そのため、来日前に、自国や

自分の現場の問題点や課題をよく調べて研究テーマを設定  
 します。また、春学期には、原則として、1カ月自国に帰って  
 実習します。研究を頭の中ではなく、実際の現場の中で  
 考えるためです。(表2)

### 3. 修了生の活躍

修了生は自国に戻って、それぞれ活躍しています。  
 多くの修了生が、所属機関でミドルリーダー（現場の  
 リーダー）としてまわりの教師達の指導的役割を担って  
 います。学科長や教師会の役員になった人達、勉強会や  
 セミナーを積極的に開いている人達もいます。

また、研究を続けている人も多く、発表もしています。  
 そのため、この修士課程では、修了生のフォローアップの  
 一環として、日本で行った研究を継続して、再び日本国内で  
 開催される学会で発表したい人のために、支援プログラム  
 を用意しました。さらに、国内外の博士課程に進んで、  
 研究を続けている人もいます。

一方、プログラムの同級生同士での連絡も続いていて、  
 世界規模のネットワークができています。修了年度を越えた  
 連携も始まっています。

## 《博士課程：日本語文化プログラム》

### 1. 概要

このプログラムの目標は、修士課程と同じように、  
 日本語教育、日本文化に関して幅広い知識とそれを  
 生かす力を持って、自国や地域で日本語教育の企画・  
 推進の中心的な役割を果たす教師や日本語教育行政官など  
 を育てることです。さらに、研究者としても、国際的な  
 場で活躍し、情報を受発信できる人材を養成しています。  
 修業年限は3年が標準です。学生の研究計画やそれまで  
 大学や修士課程で履修してきたことにあわせて、1人ずつ、  
 個別のカリキュラムを編成して指導を行っています。

### 2. 高い水準の教育研究を推進するプログラム

博士課程では、論文提出までに、次のような手順が  
 あります。在籍者は、自分の研究だけでなく、日本語教育や  
 関連分野について幅広い知識を持つことが望まれます。また、  
 自分の研究については、様々な場で研究発表を積み重ね、  
 その研究の正当性や妥当性、成果の学術的貢献度を立証  
 していかなければなりません。

- (1) 入学1年目：演習科目を8単位以上履修。
- (2) 入学2年目以降：
  - ①博士論文提出資格試験（QE）。（不合格の場合、  
1度だけ再受験できる。）
  - ②演習科目2単位以上、特別研究科目（博士論文を  
進めるための科目）を履修。
  - ③Ph.D. Candidate Seminarなどで研究成果を発表。
- (3) 入学3年目以降：論文発表会で審査を受ける。（不合格  
の場合、1度だけ再審査を受けることができる。）

現在、博士課程に在籍している学生は6名で研究テーマ  
 は、漢字学習に関する研究、日本語のアクセント指導の  
 研究、動画を利用した学習に関する研究、第二言語習得  
 におけるリキャストの研究、中等教育における外国語  
 教育政策の研究等です。

### 3. 修了生

2008年、1期生の

冷麗敏さん(中国)が、  
 「学習者の主体的な  
 授業参加を導く教師  
 の行動—中国の高等  
 教育における日本語



(中央)博士号取得第1号冷麗敏氏  
 教育の現状と課題を踏まえて—」という研究を行い、  
 博士第1号となりました。2009年には、2人目の博士が  
 出る予定です。

## 《日本語文化研究会》

2004年、この2つの大学院プログラムの教育と研究成果  
 を発信し、また、世界中に広がっている関係者の方々と  
 意見や情報を交換するために、「日本語文化研究会」を  
 設立しました。この研究会は、両プログラムの学生と修了生、  
 そして教員を中心としたメンバーで構成されています。

この研究会の活動内容は、以下の4つです。

- ①『日本語文化研究会論集』の発行  
 年1回。修士課程の特定課題研究と一般に公募した  
 投稿論文の2部構成になっている。
- ②「日本語文化研究会」の開催  
 年2回。12月の研究会では、学生が自国の日本語教育  
 について紹介する。  
 9月の研究会では、  
 研究成果の発表を  
 行っている。
- ③コロキアムの開催
- ④日本語教育に  
 関する情報の提供



第14回 日本語文化研究会

このように、日本語国際センターで行われている大学院  
 プログラムは、「各国、各地域の日本語教育界を实际にリード  
 する」力を持った人材を毎年輩出しています。私たちは、  
 彼らの活躍を心から願っています。

大学院プログラムの詳細については、以下のHPをご覧ください。

日本語国際センターのHP：  
[http://www.jpj.go.jp/j/urawa/trnng\\_t/trnng\\_t.html](http://www.jpj.go.jp/j/urawa/trnng_t/trnng_t.html)

政策研究大学院大学のHP：  
[http://www.grips.ac.jp/jp/pstudents/inter\\_programs/graduate.html](http://www.grips.ac.jp/jp/pstudents/inter_programs/graduate.html)  
[http://www.grips.ac.jp/jp/pstudents/phd\\_programs/graduate.html](http://www.grips.ac.jp/jp/pstudents/phd_programs/graduate.html)